史跡・鳥取城跡附太閤ヶ平の現在

鳥取城跡が、羽柴秀吉の本陣跡である「太閤ヶ平」とともに昭和32年に国の史跡に指定されて以来、平成19年はちょうど50年目であった。

この間、鳥取城は、久松公園としての利用、身近な周遊路としての利用を中心にしつつ、昭和18年の鳥取大震災で、あるいは経年劣化で崩壊した、近世城郭の石垣の修復を継続してきた。

史跡指定前からの経緯もあり、指定地内には現用施設である鳥取県立博物館、鳥取県立鳥取西高等学校が所在しており、現在も存続している。また、重要文化財である洋風建築・仁風閣も、当初の建設地である城内の扇御殿にそのまま保存されている。

昭和40年代には、その頃未指定であった久松山の西側を通り、山上ノ丸に至るロープウェイが設置されていた時期もあり、観光地としての開発も試みられていた。現在はロープウェイは廃止されており、路線の敷設されていた部分も拡大指定を受けている。

鳥取市では、昭和59年に「史跡鳥取城跡保存管理計画」を策定し、保存管理の方針を定めたが、上記のような利用形態との整合を図ることが難しく、長らく史跡としての整備方針を明確化することができなかった。

平成16年度より、鳥取市教育委員会を事務局として保存整備基本計画の検討をはじめ、市民と学識経験者からなる委員会(委員長:田中哲雄東北芸術工科大学教授)での検討を経て、平成17年度に「史跡鳥取城跡保存整備基本計画」を策定した。この計画では、現用の施設の当面の併存を許容することとし、従来の保存管理基準を継承しつつ可能な範囲の整備を進めることで史跡の顕在化・価値の明確化を目指している。計画期間は30年間であり、大手登城路の復元整備を最初の目標として、最終的には二ノ丸の櫓群の建造物を含む復元整備を目指すものである。

平成18年度には、この「基本計画」に基づき、第一期10年間の具体的な方針を定める「史跡鳥取城跡保存整備実施計画」(委員長:田中哲雄東北芸術工科大学教授)を策定した。この「実施計画」は、平成30年までを期間とし、大手登城路の建造物復元整備については、鳥取西高等学校の史跡環境改善につながる改築と協調して行うこととした。この「実施計画」では、それまで体系的には行われてこなかった、鳥取城及び久松山周辺の歴史環境を含む総合的な調査研究を継続して行うこと、整備や調査研究の成果を市民に伝え、史跡の利活用を推進することなどがあわせて定められている。本年報も、「史跡鳥取城跡保存整備実施計画」に基づき、鳥取城に関する調査研究の成果を、継続的に情報発信する目的で刊行されたものであり、平成19年度に実施した中世城館分布調査の速報と、従来実施されてきた発掘調査成果の全体的確認、近代以降の鳥取城跡利用の跡づけを主な内容としている。

本報告書の内容そのものについての評価とは別に、このような形で調査研究を進められるようになったのは、鳥取城にとって大きな前進である。

鳥取城についての調査研究は、これまでは個人の研究者によるものが多く、鳥取市で実

施した場合も、石垣修復のための準備調査や遺構の状況確認のための試掘、あるいは建物復元のための準備といった非常に限定された目的のものが多く、結果として鳥取城の特色を明確にし、市民にひろく発信するに至っていない。今後は、史跡としての鳥取城の特色や価値を具体的な形で示せるよう、研究成果を体系化してゆく必要がある。現在の計画では、一見分かりやすく思える、建造物を含む復元展示という手法での整備を目指しているため、基礎となる情報の明確化は、正確な情報の伝達という意味でも不可欠である。

江戸時代の地誌や戦前の地方史等の記述は別として、鳥取城についての研究は、大きく分けて

①文献等による歴史研究
②建造物の復元的研究
③遺構そのものの研究

に大別することができる。

このうち①については、戦前から始まる鳥羽正雄氏の日本城郭史研究等、総合的な研究の中でふれられているものも少なくない。戦前の福田秀太郎編『鳥取城攻防史談』（鳥取自由通信社、昭和8年）は別格としても、昭和30～40年代にかけて、荻原直正・山根幸恵らが最初の成果をとりまとめている。史跡指定もこの時期であり、市民意識も高まっていたのではないかと思われる。一方で、ロープウェーの敷設もこの時期であり、現代的な意味での史跡の保存整備とは若干温度差があったようである（藤崎定久『鳥取城』＜大塚製薬工場、昭和41年＞・荻原直正『鳥取城』（昭和34年）、山根幸恵『鳥取城』＜鳥取城刊行会、昭和41年＞＜のち昭和58年に『定本鳥取城』として増補再刊＞、山根幸恵『鳥取城問答』＜鳥取城ロープウェー、昭和45年＞など）。その後、鳥取県立博物館『鳥取県の自然と歴史〈6〉久松山鳥取城』（昭和58年）が刊行されている。

また、高橋正弘『因伯の戦国城郭 通史編』（昭和61年・私家版）、吉川広昭・小坂博之『山名豊国』（昭和48年・私家版）によって、中世城郭としての鳥取城について考証が進められ、浜崎洋三「鳥取城の成立について」（『鳥取市史研究』3号）によって鳥取城創建について考察がなされた。近年の鳥取市歴史博物館の展覧会図録『天正九年鳥取城をめぐる戦い 毛利・織田戦争と戦国』（鳥取市歴史博物館やまびこ館、平成17年）や、鳥取県史ブックレット1『織田vs毛利 ―鳥取をめぐる攻防―』（平成19年、鳥取県）等、新しい成果があり、この分野の研究は大きく前進している。

②については、いうまでもなく城戸久「因幡鳥取城天守と三階櫓の建築」（『名古屋工業大学学報』第3号、昭和26年）が先駆的な業績であり、その後、昭和56年に鳥取市が実施した「鳥取城に関する文献資料並びに御三階櫓復元に関する調査」、さらにそれをもとにまとめた松岡利郎『鳥取城三階櫓の復原的考察』（昭和54年）が発表されている。この段階で把握できた資料では三階櫓の完全復元は困難であると考えられたためか、その後詳細な研究や復元案は発表されていない。

③のうち、考古学的な調査成果については調査報告本編でまとめているので、そちらを参照していただきたい。

中世城館の分布調査については、吉田浅雄氏の業績が大きい。『羽柴秀吉の天正鳥取陣営跡之圖』(燈心亭文庫 昭和60)・『戦国城砦 久松山鳥取城跡之圖』(昭和58)・『因幡 鳥取城跡要圖』(燈心亭文庫・昭和62年)といった一連の成果は、鳥取県『中世城館等分布調査報告』第1集・因幡編(鳥取県、平成14年)が刊行された現在でも、久松山の中世城郭の概要を知るために欠かせない文献となっている。